**欧州ＣＬ決勝、真逆の思想持つチームの激突**

サッカーの欧州クラブ王者を決める欧州チャンピオンズリーグ（ＣＬ）決勝が28日、イタリア・ミラノで行われる。

　史上最多の10度の優勝を誇るレアル・マドリードと初優勝を目指すアトレチコ・マドリードというスペイン勢同士の対決。２年前のリスボンでの決勝でも対戦し、延長戦の末、Ｒ・マドリードが４―１で勝っている。

■Ｒ・マドリードの強み、前線の３人の破壊力

　Ｒ・マドリードの強みはいうまでもなく、前線の３人の破壊力にある。ロナルド、ベンゼマ、ベールはたった１人で局面を打開できる。

　そのスピードはケタ外れで、チーム全体のパスワークの速さではなく、個人のスピードだけで崩してしまう。基本的にはこの３人にお任せ。そこに運動量の豊富なモドリッチが絡んでいく。押し込まれていても一気にカウンターでゴールまで持っていく力がある。

　気になるのは中盤の構成をどうするかだ。守備専門のカゼミーロを中盤の底に置いて、その１列前にモドリッチとクロース（あるいはイスコ）を配するのか。アンカーはクロースに任せ、その前にモドリッチとイスコなのか。どちらの組み合わせにするかが見どころの一つになる。

　今季途中から指揮をとるジダン監督はカゼミーロを重用し、中盤を落ち着かせることが多いが、カゼミーロからは気の利いたパスは出ない。

　クロースなら長いパスを自在に出せる。左右の深いところにも配れる。攻めの速度が一度、落ちてしまうと、そこからのＡ・マドリードの守備はしつこい。

　ブロックをつくられてしまうと、Ｒ・マドリードといえども容易に崩せない。だから早いタイミングでクロースの長距離パスで一気に深いところまで運んでしまったほうがいい。

　さらにイスコを入れるとパスの回りがよくなる。個人的にはクロース、モドリッチ、イスコのセットの方がいいと思う。

　マンチェスター・シティー（イングランド）との準決勝はアウェーの第１戦はカゼミーロを使って０―０の引き分け。ホームの第２戦はイスコを起用したセットで臨み１―０で勝った。ロナルドが復帰したということもあるが、攻撃の流れは第２戦のほうがよかった。

■モドリッチとイスコがどう動くか

　モドリッチをトップ下（中央）に近いところに置き、イスコを左に出して、少しずつ相手をずらす。攻めの変化をつけるのは狭いところでプレーできるモドリッチ。モドリッチとイスコの２人が前線の３人の後ろでどう動くかがカギになる。

　しかし、これはあくまで私の考え方。Ａ・マドリードを相手にして、Ｒ・マドリードのジダン監督がどう考えるか。

　相手の攻撃のキーマンであるグリーズマンをつかまえるにはカゼミーロを使ったほうがいいとみるかもしれない。最初から相手を圧倒したいならイスコなのだが……。

　カゼミーロで手堅く戦って、勝負どころでイスコ投入なのか。イスコを先発させて先行し、カゼミーロで逃げ切るのか。手は２つある。

　準決勝までのホームアンドアウェー方式ではなく決勝は一発勝負（延長戦、ＰＫ戦あり）なので、監督は点差、流れ、残り時間によって、どんどん手を打っていかなくてはならない。速やかに、適切に動かないと間に合わなくなる。監督の手腕が勝敗に占める割合は極めて高い。

　Ａ・マドリードの攻めの軸は前述したグリーズマン。フェルナンドトレスもこのところ調子を上げているが、グリーズマンがいなかったら、Ａ・マドリードはここまで勝ち進んでいない。

　スピードがあるし、スペースを見つける目があるし、シュートがうまい。下がったところから出てくるから、相手にするとつかまえにくい。

　Ｒ・マドリードはマルセロ、カルバハルの両ＳＢが攻撃に出ていきがち。ＣＢラモスも機を見て参戦する。無理に出ていくと、その裏をコケ、ニゲスらに突かれる危険性がある。だからジダンはカゼミーロを中盤の底に置いて、２人のＣＢの間に入るような形で守りたがるのだろう。

■Ａ・マドリード、強固な守備を基盤に戦う

　同じマドリードを本拠地としていながら、両者のサッカーのスタイルは対照的だ。Ａ・マドリードは強固な守備を基盤にして戦う。

　どんなに押し込まれても耐えるタフさがある。攻め続けられても苦にしない精神的な強さがある。相手にいくらボールを保持されても、何とも思わない。Ｒ・マドリードやバルセロナとは真逆の思想で戦う。

　シメオネ監督ははとにかく１対１の勝負で勝つことを求める。チャレンジ・アンド・カバーのチャレンジ（寄せ）が激しく厳しい。そのうえで、最初のチャレンジが外されたら、速やかにカバーする形ができている。

　たとえば、コケが外されたらフェリペルイス、さらにゴディン。４―４―２を基本布陣にしながら、縦、横の強い関係が築かれていて、常にペアになって守備の仕事ができるようになっている。最初の寄せが強烈なので、カバーするのは楽だと思う。

　ここぞのときには３人目が寄せて、一気に相手を囲んでボールを奪い切る力がある。組織が整備されているので90分間、守備力が落ちない。ばらけないし、間延びしない。

　そのサッカーに面白みはないが、やっている選手たちは「はまってるぞー」という感覚なのだろう。攻める側はボールを保持できているのに「おかしいぞ、おかしいぞ」と首をひねり続ける。

　もう一つの強みはセットプレー。攻めさせておいて、相手が攻め疲れ、集中力が切れたところでセットプレーで効率よく得点してしまう。

　監督の手腕を比べたら、経験豊富なシメオネが上なのは明らか。勝つためなら、汚いことでも何でもする。嫌われ者になっても平気。シメオネにすれば、Ｒ・マドリードがお坊ちゃんに見えるのではないか。

　スペイン人は美しく勝つことを求めるが、アルゼンチン人のシメオネはそんなことにお構いなし。勝てばいいんでしょという現実的な思想のもとでサッカーをする。シメオネには２年前の決勝で後半終了間際までリードしていながら敗れたリベンジの思いもある。その意気込みは尋常ではないだろう。

　最近の直接対決を振り返ると、Ｒ・マドリードはＡ・マドリードを大の苦手にしている。２年前の決勝はＲ・マドリードが制したが、その後の国内の戦いではＡ・マドリードが８戦無敗（５勝３分け）。今季のスペインリーグもＡ・マドリードの１勝１分けだった。

■最後にクラブの格の差が出てしまうか

　では今回、どちらが勝つのだろう。０―０のまま進んで延長戦までもつれるかもしれない。Ａ・マドリードの守備がバッチリはまるだろう。

　それでも、スーパープレーが出て「Ｒ・マドリードの勝ち」という気がしてならない。前線のロナルド、ベンゼマ、ベールは超人的なプレーができる。王者になるチームにはそういう選手がいるものだ。

　残念ながら、Ａ・マドリードにはそこまでの選手がいない。最後にクラブの格の差が出てしまうのではないか。

　すでに欧州リーグ決勝でセビリア（スペイン）が勝ち、３連覇を果たしている。欧州ＣＬも14年のＲ・マドリード、15年のバルセロナに続きスペイン勢の優勝が決まっている。スペインリーグには高い技術と戦術眼を備えた選手がそろっている。頂点に立つのは当然のことという気がする。

（元Ｊ１仙台監督）